
Tomと過ごした日々

ばにえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tomと過ごした日々

【Nコード】

N4404N

【作者名】

ばにえ

【あらすじ】

母は若い頃異世界にトリップしたまま帰ってこないらしい。双子の兄と姉は異世界にそれぞれ勇者と巫女として召還された。…そんな神に愛されまくっている家族の中で、ごくごく平凡に暮らす白鳥瑠那、15歳。顔も頭も良い完璧な家族に囲まれて、私の立場は無いと思いませんか？常人にないオーラを持つ家族のせいで、いじめられ、殺されそうになり。そんな環境のせいで、地味で平和な生活を望むようになった瑠那は、兄が異世界で自分の婚姻届を勝手に提出していたことを知る。そこから彼女の平凡な日常生活は崩れてい

く。
Tomは関係ありません。

母は若い頃異世界にトリップしたまま帰ってこないらしい。双子の兄と姉は異世界にそれぞれ勇者と巫女として召還された。その後の行方はまったく知れず…

母は黒髪黒目の生粋の日本人だ。その美貌はどんな男性でも虜にしたらしい。才色兼備で出来ないことなどなかった。異世界でもいろんな男を虜にしているのだろう。

そして、その細胞を受け継いだ兄たち。母が異世界で作った子どもで、どこぞの勇者の末裔だとか。二人とも常人にはないオーラが見えている。

そんな神に愛されまくっている家族の中で、ごくごく平凡に暮らす白鳥瑠那、15歳。両親はおらず母方の祖父と祖母に育てられたが、そこそこ裕福な家庭だと思う。

黒ぶち眼鏡に、後ろで一つにくくられた黒髪。

とりあえず、目立ちたくなかった。

兄は金髪碧眼で、姉は金髪に青の瞳。どちらとも成績優秀、運動神経良好、顔も良い。そんなに完璧な家族に囲まれて、私の立場は無いと思いませんか？

兄たちの通う学校には、親衛隊がいた。あんなの漫画だけの話しかと思っていたら、違ったようだ。

…兄達は、毎日取り巻きに囲まれて登校していた。

学校では親衛隊の方から手ひどい仕打ちを受け、一緒に町を歩けば

嫉妬の目を向けられ。私を消すために人を雇う奴までいるのだから、もうやってられない。

…そんな私が普通の女の子らしく生活を送れるはずもなく。

「おはよー、瑠那。そういえば、お兄様たちどうしてるの？最近、見ないわねえ」

異世界に行ってます、なんて言えない。

何で私がこんな目にあわなくてはならないのか。後に残されたものがどれだけ大変か考えて欲しい。美男美女の双子で有名な兄たちは、常に話題に上る。…その中で取り繕うのはどれだけ大変か。

「ん〜、日本にはいないみたい。私も最近会えなくて」

困ったような笑みを浮かべて答える。

「そっかー。残念だねー」

残念？ 嬉しいの間違いではないかな？

しかし、彼らがないとなると周りの不満がこちらに来そうなので幸せな生活が送れるとは限らない。ああ、憂鬱だ。

そんなこんなで平凡を愛する妹の日常は過ぎて行く。

…その後、面倒ごとに巻き込まれるとはまったく知らずに。

「結婚？」

「ああ…お前の兄も了承済みだ」

瑠那は兄に対する怒りが込み上げてきて、ふるふると身体を震わせた。

現在の状況を説明すると、瑠那は異世界の王城にいて、銀髪に紫の瞳を持つ大国のイケメン王太子殿下に求婚されている。

何故こんなことになったかというところ、間違いなく兄が勇者としての国に召還されたのが原因である。

勇者を召還して権力を強めすぎた大国は、他の国から警戒されるようになった。他の国は大国に対抗するため、自国にも勇者の血を欲したのである。…そこで目をつけられたのが、勇者の妹である瑠那である。

大国は対策として、勇者の妹を王太子妃に迎えて瑠那を守ることにした。

瑠那が風呂上りにのんきに服を身に付けていると、いきなり足元に魔法陣が浮かび上がったのだ。

…あの時、服を引っ掴んで良かった。あのままだと下着で召還されるところだった。

「大国の王子なら、王女サマでも貴族の令嬢サマでも迎える方が国のためだと思っただけど？」

瑠那は大国の王子をじとつと睨みつける。
本当に腹が立つ。私はイケメンが嫌いなのだ…顔の良い者は兄だけで十分だ。

「あいにく、うちは圧倒的権力を誇っているのな。これ以上権力を得る必要もない。唯一心配なのはお前だ」

「私のせいで国が減びそうだったのに、よくえらそーに言えるわね」
「お前ごとき…と言いたいところだが、お前に何かあれば俺の命が危ないのだ」

そう…重度のススコンである勇者は、きっと瑠那が危険な目にあえば王子を殺すだろう。というか、魔王と手を組んでこの世界を破滅させかねない。それを防ぐためにも、彼女との結婚は必要不可欠なのだ。

「大体、私は勇者の血なんか引いてないのに…」

そつだ。私は勇者の血など、流れていない。勇者の血は、兄の父親の家系に流れている血である。兄とは異父兄妹の関係である瑠那には、勇者の血は一滴も流れていない。
明らかに、異世界の人々の勘違いである。お前らの勘違いだと叫んでやりたい。迷惑極まりない。

「私は…しないわよ」

「ふっ、残念だな。もう書類は提出済みだ」

最大の爆弾を投下された。

…ここで言う書類とは、間違いなく婚姻届のことだろう。

ということは、瑠那はもう結婚しているということになる。では、

先ほどは求婚でなく結婚することへの確認に過ぎないのか。
15歳で既婚者なんて、ありえないんですけど。」

「…そういえば私、署名した覚えはないんだけど」
「問題ない。兄が代筆したからな」

「…この世界は、代筆で人の結婚が決まるのか。理不尽だと感じずにはいられない。私の幸せはどこに消えたのだろう。」

「ちなみに、離婚は無理だ」

最後の望みも先回りされてあっけなく打ち砕かれてしまった。
瑠那は、はあ…とため息をつく。

逃げ道はない。この結婚を認めるしかないのか？

今日は今までで最悪の一日だった。そして、今までで一番世の中は理不尽だと感じた一日だった。

2 (後書き)

できれば感想を書いていただけると嬉しいです。

9 / 9 王子の容姿変更。

そんな簡単に諦める瑠那ではなかった。

瑠那は翌日、こっそり部屋を抜け出した。監視の目を潜り抜けそろそると目的の部屋を目指す。

…幸い、衛兵たちが気づくことはなかった。

「ふふ、ちよろいもんね」

この国の甘い警備体制には結構問題があるとは思うが、今回は正直助かった。

目的の部屋には簡単に辿り着けた。目の前には豪華な装飾が施された大きな扉がある。

物音を立てないように気をつけながら机の上を目指す。

もちろん目的は、瑠那と王子の結婚の書類。それが国王の部屋にあると知った瑠那は、盗み出して破り捨てることを誓った。

「見つけたっ！」

そこには、婚姻届。

瑠那は思わず手に取り、その婚約届を見て喜んだ。

紙には、アルヴィアス・リーウエンと書かれてあった。

瑠那はこちらに召還された時、文字を読むのには困らなかった。だが、誰にも言っていない。正直皆のことを信用していないからだ。

…王子の名前、初めて知った。

そういえば、どちらとも名乗るタイミングを逃していた。まあ、どうでもいいけど。

「何が見つけた、だ？」

嫌な予感がして振り返って、見る。そこに立っていたのは、王太子だった。

「ずっと見てたでしょ？私のこと」

「ああ、監視の目を潜り抜け、国王の部屋に忍び込んだのは見事だったな。お前がいなくなったと侍女から報告があったんだ」

「てかこれ、破れないじゃない」

瑠那は紙を指差していった。

「魔法がかけてあるからな」

王子はふんつと鼻を鳴らす。

「正直、何が気に入らない？俺はお前に何でも与えてやれる。最上級の環境で暮らせるし、ドレスも宝石も何でも…な」

「お金があれば幸福になるなんて、金持ちの言うことね。民はお金がなくとも必死に生きて、一生懸命だからこそ生活が充実していると感じる人もいるのよ。…民の気持ちが理解できないようじゃあ、未来の国王失格よ？」

瑠那はそう言いながら、王子の頬を人差し指でぷにゅと押した。

王子は、不快そうに眉をひそめる。

「…で、本当のところ何が気に食わないんだ？」

「顔がいいところが嫌。お兄様のせいで、美しい人は苦手なの。ふいつと顔を背けると、王子が呆れたように溜め息を吐く。」

「だって、お兄様のあの目立つ顔のせいで何度酷い目にあったことか。妹という立場にいる私が気に入らなくて、毎日嫌がらせの嵐よ

「…本当に、顔が良い人といるとろくなことがないわ」

「…他には？」

「そもそも、お兄様が私の結婚を勝手に決めたこと…かな？」

これが、瑠那の本当の気持ちなのだろう。

今までののは、一人何も知らされなかったことに納得できずにいた瑠那のささやかな抵抗だ。

「では、俺のことは嫌いではないのだな？」

「顔以外は。将来良い国王様になれるわよ、きっと」

にこにこ笑みを浮かべ、瑠那は答えた。

「…ところで、これって私の名前？」

瑠那は婚姻届の兄の代筆と思われるところを指差した。

「ああ、ルーナ・グラディアス…と書いてあるが？グラディアスはお前の兄がこちらで名乗っている姓だ」

「…私、お兄様と姓が違うのだけど？」

「…何？」

「だって、私お兄様とは異父兄弟にあたるもの。勇者の血とやらは一滴も流れてないわよ？」

王子はびっくりして無言になっている。

「おーい、大丈夫？」

王子の前で手をひらひらと振ってみる。

「勇者の血筋ではないだと？昨日言っていたことは本当だったのか…」

「少なくとも、父親が違うことは確かね」

「だとしたら、なんでこんな大変な間違いをしているんだ、俺たち

は

ついには頭を抱えて、座り込んでしまった。

それはそうだろう。瑠那に勇者の血が流れていると誤解していたせいで、現在世界が混乱しているのだから。

「じゃあ、結婚は無効？」

瑠那はわくわくしながら聞いてみる。

「…残念だが、国民に発表したから取り消せないし、式の手配も進んでいる。今さら無理だな」

「そっか…」

残念そうに瑠那は言う。

「俺は、お前のことはそんなに嫌いではないぞ？顔は地味だし腹の立つ性格をしているがな」

「それ…褒め言葉になってない。なんか嬉しくない」

こうして、瑠那の結婚は呆気なく決まった。

3 (後書き)

評価してくれる人が少なくて寂しいです。

もう一つの「白銀の華」シリーズはたくさん評価していただいたのに。

まあ、こちらは文章ぐだぐだですからね！。

感想などお待ちしています。

「お前：何でここにいる？」

アルヴィアスはその美貌を歪めながら言う。

「いいじゃない。邪魔する訳じゃないんだし」

瑠那は今、執務室にいた。

のんきにソファに腰掛けて仕事中の王太子を見つめている。

「…そうではない。今は勉強の時間ではなかったのか？」

そうだ。今日から勉強が始まったのだ。

まずは、言葉の勉強から。翻訳魔法をかけてもらっている瑠那は、最初から言語の違いに困ることはなかった。それなら、一生かけてくれていればいいのと言うと、魔法使いたちにはこれ以上面倒をかけるなどのことだった。

「ルーナ様ー！！どこにいらっしやいますかー？」

遠くから教育係の声が響く。その声はどんどんこちらに向かってきているように思えた。

…まずい。このままでは教育係に捕まってしまう。

「じゃ、またね。王太子殿下さま」

ひらひらと手を振りながらにつこりと笑みを浮かべて瑠那は扉から飛び出していった。

「殿下。こちらに姫様はいらっしゃいませんでした？」
「ああ、来たぞ。………そんなに焦ってどうしたのだ？」
「姫様、言葉の練習のために翻訳魔法を解いたままなのです。ああ、まだお城に不慣れでいらっしやるのに、言葉も通じないのではまずいです」

主に、道に迷った時などに。

「先ほど、俺と普通に会話していたが？」
「……………え？そんなはず、ありませんわ」
二人は困惑するばかりであった。

アルヴィアスは不服そうな顔をしながらも城の中を歩き回っていた。

…まったく、何で俺が探さねばならないのだ。
瑠那が逃げ出した後も政務をこなしていたが、数時間たった後に侍女が部屋を訪れ、彼女を探しているが、いまだ見つからないのだと泣き付いて来た。

彼女は妃となることに抵抗を見せるものの、それは単に不満を表しているからに過ぎない。
自分の知らないところで自分の運命が変わっていく…それは逃れられないものでありながら、抗いたくなる。

いつのまにか、アルヴィアスは庭園を歩いていた。

彼女がここにいる可能性は十分にある。城の中で、ここは息抜きができる場所に違いないからだ。

彼女はすぐに見つかった。

木にもたれて木陰ですやすやと寝息を立てている。その寝顔は穏やかで、身体の調子が悪いとかいう訳ではなさそうなのでほっとする。

アルヴィアスは仕方がないなと溜め息を吐きながら彼女を抱き上げ、彼女の部屋へと歩き出した。

それにしても、ルーナは軽い。細身の身体は、運動など出来ないのではないかと思うほどだが、その身体には女性的な柔らかさを感じる。肌のきめは細かいし、手足はすらりとしている。

これは、兄と同じ遺伝子が少しは入っていた証拠だろう。

部屋に着くと、王太子に抱きかかえられて腕の中で目を閉じている瑠那を見て、侍女は真っ青になった。

「すぐに、医師を…」

「問題ない。眠っているだけだ」

侍女を落ち着かせて退出させると、アルヴィアスは瑠那を寝台に下ろした。

瑠那が顔を横にしたとき、彼女の眼鏡がずりりと落ちた。

その時、アルヴィアスは固まってしまふ。

…意外と、顔が良かったのか。

彼女は美しかった。

すっととおった鼻、小さな唇。白い肌とは対照的なつややかな黒髪。アルヴィアスはその整った容姿を飽くことなく見つめた。

…ただ、瞼の奥に隠された瞳の色が見えないのが惜しかった。

4 (後書き)

評価ポイントありがとうございます。

「んー…」

目を覚ましてみると、そこは庭園ではなく自分の部屋だった。

「やっと目を覚ましたか」

声を放ったのは王太子だった。

「あ、もしかして運んでくれたのあなた？ありがとうございます」

「侍女が泣き付いて来たぞ。次から勝手にいなくなるなよ」

「はい。…ところで、眼鏡は？」

瑠那にとって眼鏡は必要不可欠なものだ。あれがないと生きていけない。

「必要ないだろう。目が悪いわけではないのだろう？」

そう、眼鏡には度が入っていなかった。瑠那は視力はとてもいい。

「そうだけど、私にとっては命の次に大切なものなの！」

「眼鏡をかける必要はない。お前の瞳は、こんなにも美しいのに」

瑠那がはっと気付くと、王子は目の前に立っていた。

アルヴィアスは瑠那の頬に手を添え、瞳を覗き込んでいる。

「……………ん？」

アルヴィアスが何かに気付いたように声を上げる。

「お前の瞳…青の中に銀が散りばめられたように輝いている」

瑠那の瞳は光が当たって、所々が銀色に煌めいていて、それはまるで空に星屑が散らばっているようだ。

この瞳は平凡な容姿の中で瑠那の唯一目立ってしまう要素だった。日本ではこの瞳を隠すためにカラーコンタクトをつけ、眼鏡までしていた。

…兄達がハーフだということが知れ渡っていることは理解しているも、自分がそれだと明かす気にはなれなかった。

「銀彩の瞳」…お前、もしかしてセレイアの王族か？」

セレイアとは、数年前に滅んだ国の名である。王族たちは類稀な才を持ち、国のために必要な才能…政治能力や勉学の知識、軍の指揮能力などをすべて有している。彼らはその才能を国のために使い国をどんどん豊かにしていったのだが、最後は他国に侵攻されて呆気なく滅んでしまった。

今でもかの国が滅んだのは何かの間違いではないかと言われている。

「………それを知ってどうするつもり？私を利用する？」

瑠那は相手の心理を伺うように見つめた。

ほら、やはり信用できない。だから心を許せない。兄の親友であっても、心を許すことは…絶対に来ないことだ。

「政治に携わるものとして利用させては、もらっ」

瑠那はやっぱり…と思ってしまった。

そうだ、人は自分の利益だけしか考えない。自分を犠牲にして誰かのために働くような人は、ほんの一握りしかない。

「だが、お前を一生守ることは…誓う。王太子としても、お前の夫としても…必ず、お前を守り抜く」

そういうアルヴィアスの瞳は真剣だった。

瑠那は、ただ頷くことしか出来なかった。

「では…こちらの言葉が話せるのは、そのせいかな？」

「そうよ。でも、こちらに来たのは少しの間だけだったから、王族として過ごしたことはほとんどないわ」

瑠那は地球育ちだ。こちらの世界でセレイアの姫として暮らしたことはほとんどないのだ。

12歳の時に一度セレイア国に呼び出されてそれっきりだ。

「お前の父は…“最後の王”か？」

「……………そうよ。会ったことはないけどね」

「賢明で、素晴らしい王だったと聞く。お前は、その名を持つことにもっと誇りを持つべきだ。…俺が、リーウエンの名を誇りに思っているように」

瑠那はセレイアの名を隠して生きてきた。それはもちろん、命を狙われる可能性があったからというのもあるが、彼女ははまだ自身身がセレイアの名を名乗ることを拒んでいる。

「……そうね。いつか、胸を張って答えられるようになりたいものね」
瑠那は微笑んだ。

「……とりあえず、言語の教育は外すように言っとくからな」
王子はそれだけ言うと、部屋から出て行った。

瑠那は今、入浴も歯磨きも済ませて寝ようと思っていたところだった。

そこに、現れた　　イケメン王子殿下さまが。

「問題ないだろう？夫婦が一緒に寝て何がおかしい？」

「ありまくりだわ。私、事実上の結婚しか認めたくもりないし」

「…まだ、それを言うか」

はあ、とアルヴィアスは溜め息を吐く。

「いい加減、諦めたらどうだ。離婚は出来ないのだし」

「人間、諦めたら終わりよ。諦めないからこそ奇跡は起きるのよ」

瑠那は拳を握り締めながら言う。

そう、何事も諦めたら終わりだ。離婚は駄目だとしても、この城から抜け出すことはまだ諦めない。今現在、脱走のための計画を着々と練っている。

「大丈夫だ。お前が脱走しないように見張るだけだ。何もしないから、安心して寝ろ」

「脱走って…私、そんなに信用ないの？」

「お前の今までの行動を振り返ってみる。信用できると言う方がおかしいだろう」

今までしたこと？まだ、授業の脱走くらいしかしてないわよ？たまたまに、悪戯しかけてみたりしたけど。王子は真っ赤になって怒って、結構可愛かった。

「もういいわ。私、別の部屋で寝るから」

「さっきの話、聞いていたか？俺は、脱走を防ぐためにここにいるんだ。この部屋から出すわけないだろうが」

「え〜」

「文句言つな。さつさと寝るぞ」

アルヴィアスは瑠那の手を引っ張り、寝台の方へと連れて行く。

「半径2メートル以内に近寄らないでね？」

瑠那は微笑みながら言った。

寝台の広さはかなりの広さであるから、二人が接触する心配はないだろう。

…けど、念のため。

「では、お休みなさい、王太子殿下さま」

寝台の端っこに座り、反対の端っこにいるアルヴィアスに手を振った。

「…その腹の立つ呼び方、いい加減やめろ。アルでいい」

「え〜？心を込めて呼んでるのに…」

敬意はこもっていないけど、心はたっぷり詰まっている。…おもに、怒りとか、憎しみとか、恨みとか。

「やめろ。今後一切その呼び方で呼ぶな」

「はい」

二人ともいそいそと掛け布に潜る。

「……………なあ」

「…何？」

「やっぱり、おやすみのキスくらいさせてくれないか？」

横になったまま身体の向きを変えてみると、アルがもう近距離にいた。

「もう、仕方ないわね。アルはお子ちゃまなんだから」

「黙れ」

ちゅ…………と額にキスしたのはアルヴィアスでなく瑠那だった。

「ふふっ、驚いたでしょう？」

瑠那は悪戯っ子のような笑みを浮かべて言う。

アルヴィアスは最初こそ驚いて目を見開いていたものの、突然にやりと笑う。

「そうか…お前がそのつもりなら」

アルヴィアスは、瑠那の上に覆い被さってくる。そして、瑠那の唇に口付けを落とした。

「……………」

瑠那は固まったまま無反応だった。

「……………どうした？」

「やっぱり、兄様にあなたを殺してもらおうかしら？」

瑠那から恐ろしい言葉が聞こえてきて、アルヴィアスは身体を離れた。

「兄には何も言うなよ。あいつは妹が絡むと何をするか分からん」

「大丈夫よ。死ぬ前に止めてあげるから」

「……絶対助けるよ」

大真面目な顔で言うアルヴィアスに瑠那はぷつと吹き出した。

「じゃあ、お休み………アル」

「ああ……お休み、ルーナ」

二人は結局密着して眠ることとなる。その事実気付くのは、目が覚めた後である。

6 (後書き)

王子様の容姿変えました。 勇者な兄と容姿がかぶるといふ大失態。 申し訳ありません。

王子がルーナと呼ぶ件に関して。

瑠那の兄弟は異世界と地球の名前、ふたつ持っています。

瑠那はセレイアの王族として、三つ目の名前も持っていますが。

瑠那は、爽やかな朝を迎えた……はずだった。

目を開けると、目の前にはイケメンの顔が間近にあった。

「よく眠れたか？」

アルは柔らかい表情で瑠那に問う。紫の瞳が瑠那を覗き込んでくる。

「……………いい」

「ん？」

「……………顔が近い。……………美男子は嫌いって言ったのに」

瑠那はアルの胸を押して退けようとしたが、瑠那の力では敵わなかった。

アルの顔は綺麗だ。王子様……って感じの兄とは違い、純粹に綺麗な整った顔してるなあと思う。

アルは自分の胸を押す瑠那の手を、やめろと言わんばかりに掴んだ。

「そう言うがな、お前だって見た目が良いだろうが。兄と同じ遺伝子を受け継いでいると言えるところぞ」

「兄様と一緒にしないでよ」

朝から嫌な気分になってしまった。

怒った瑠那はさっさと自室からアルを追い出したのだった。

「お前、セレイアの王族なら“政治の書”を持っているのではないか？」

アルは突然瑠那を執務室に呼び出すと尋ねてきた。

…いきなり呼び出したと思ったら、そんなことか。

政治の書とは代々セレイアの王族が持っている、国を治める者へのアドバイスみたいなものを書いてある書物なのだが、他国では「それを持っていれば思い通りに政治ができる」とか伝わっているらしく、それを求める者はいまだに多いらしい。

……本当にそんなに万能だったら国は滅びてないって　と心の中で叫んでみるが、残念ながら書物が伝説として語られる今、瑠那の言ったことは信じてもらえないだろう。

「持つてるわよ。これのこと？」

瑠那は政治の書を手に持ってひらひらしている。

「お前っ！そんな雑な扱いをするな。国宝だぞ……てか、いまだここから取り出した？」

「そんなのどうでもいいじゃない？あなたにとって“これが在る”っていう事実が大事なのでは？」

「いきなり手元に現れたら、そう問いたくもなる。…で、どこからでした？」

「………亜空間？」

「何で質問形なんだ。亜空間とは何だ、亜空間とは」

「さあ、よく知らない。その質問の答えは魔法研究家に任せるわ」

本当に知らない。瑠那は魔法を使っても、その論理とかが理解でき

ているわけではない。

「…まあいい。その書物をよこせ」

「やだ、安易に他国の王族に渡せるわけじゃないじゃない」

「何が欲しい？金か、ドレスか？」

「そんなのでつられるほど愚かではないつもりよ」

「…ちつ。どうやったら手に入る？」

「ん〜じゃあ、あなたが立派な王様になったらいつか見せてあげる」

瑠那はそう言うてにっこり笑った。

その後、王太子は政務に一生懸命励むようになったとき。

7 (後書き)

アルさん、瑠那の亜空間についてはスルーかよ!!

…と叫びたくなる作者です。

この作品はあくまで作者の気まぐれと息抜きで書いているので、更新速度は遅いです。

作者は「白銀の華」をメインに書きますが、スランプに陥ったりするようないことがあればこの作品の更新が速くなるかもしれません。

瑠那とアルヴィアスは一緒に昼食を取っていた。

「お前：食べないのか？」

「あゝ食べる食べる」

食事の手を止めて尋ねてくるアルに適当に返事を返す。

「初日からあまり食べ物をお口にしていないうと侍女から聞いている。口に合わないのか？」

「さすが王族の食べるものなだけあって、おいしいわよ？」

「じゃあ何が問題だ？」

「：聞かないで。ささやかな少女の悩みよ」

「そんなに食べないと心配になる。餓死されても困るだろうが」

「じゃあ、言わせて貰うけど：こんなに動かないのに、お腹がすくわけないでしょう」

瑠那はバンと机を叩いて言った。

腹立つゝ毎日毎日部屋に閉じ込めて！

部屋の中では動く範囲も限られている。いくら瑠那の部屋が広いといっても運動はそれほど出来ない。というかしたら侍女に怒られる。

：朝からこんなに食べられるか、と思うほどの朝食。昼食の次には甘いお菓子が大量に並ぶ午後のお茶の時間。夕食に至っては何人分だ？と思うほどの何枚もの大皿が大きなテーブルにずらりと並べられる。

こんな豪華な生活になれてぶくぶく太るのは御免だ。栄養のコントロールも仕える者の役目だとは思わないのか？

「殿下、今勇者様から伝言が！」

「何だ？」

勇者から伝言が入るとは、よほどのことがあったに違いない。アルは思わず席から立ち上がる。

「そのまま伝えますと…」「アル、瑠那ちゃん呼び出したんだって？可愛い妹にぜひとも会いたいので今から帰るな〜」「…とのことです…」

それを聞いた瞬間、アルはがくつと脱力する。

…あのシスコンめ。世界の存亡が自身にかかっているという自覚があるのか？

昼食を食べ終わった後、アルは瑠那をつれて執務室に行く。言葉を習得する必要がないということ、瑠那の授業時間はかなり空きができた。

「ねえ、気になったんだけど、勇者の血筋の証は金の髪と瞳だったわよね？お兄様、瞳の色が緑だった気が…」

「そんな情報どこから聞いたんだ？…それについては問題ない。覚醒して金になっている。帰ってきた時見てみるといい」

「帰ってきたら、兄様倒す！今までの恨みを全部ぶつけてやる」

「言つとくが、勇者は強いからな…」

言い終わらないうちに、なぜかいきなり瑠那が部屋を飛び出し、駆け出した。

「おいつ」

慌ててアルは追いかける。

…また脱走などされては困る。

その先には…

「おおーい。帰ってきたぞ〜！」

妹に会えるということの上機嫌の勇者が手を振っていた。

「瑠那ちゃんはどこか…っておわ〜！」

勇者は慌てて何かを避けた。

勇者にぶつかりそうになったのは、闇魔法だった。

闇魔法は魔族しか使えない魔法で、人間で使える者がいるとは聞いたことがない。闇魔法は強力で、それに対抗できるのは光魔法だけだと言われている。ちなみに光魔法は、勇者しか使えないものだ。

勇者は警戒の色を纏う。アルも、腰に下げていた剣を抜いた。

またも闇魔法が飛んできた。

「仕方がない…この術を使うしかないか」

勇者は攻撃を避けながら光魔法を発動させようとした。

「よせっ！その術は…」

アルは勇者を止めようと叫ぶ。

この術はあまりにも高等なものなので成功した例がなかった。

勇者の術はどんどん膨れ上がって行く。

「くっ…」

案の定、押さえきれなくなったのか、途中で魔法が暴走を始めた。

…とその時。

闇魔法が勇者を包み魔法を打ち消した。

状況を見ていたものは、ぽかんとした。…闇魔法が勇者を助けた？

「お兄様、お久しぶりです」

にこっと笑って現れたのは勇者の愛する可愛い可愛い妹だった。

「さっきの、お前か…？」

「ふふっ。魔族の襲撃かと思って、びっくりしたでしょう。勝手に妹の結婚を決めた兄様にささやかな悪戯よ？」

にこっと笑って言う瑠那に、周りにいた人々は恐怖で凍りついてい

る。…闇魔法はさすがにささやかな悪戯とは言えない。

「お前：なぜ、闇魔法が使える？」

最初に言葉を発したのは、アルだった。その口調は瑠那が見たことないほど厳しいものだった。

勇者は、妹が魔族の仲間（？）ということにショックを受けて呆然としている。

「ん〜異世界の血？そのせいで、私にこの世界の常識は当てはまらないのよ」

「では、魔族の仲間：ではないのだな？」

「当たり前じゃない。それならさっさと兄様殺すし、ね？」

だが、アルの表情はまだ疑いを含んでいる様子だった。

「もー。どうすれば信じてもらえるかなー？」

瑠那は頭を抱えて座り込んでしまった。

……自分には、身の潔白を証明できる証拠はない…逆に、魔族と通じている？証拠はあるが。

「いや…闇魔法を見せられるとさすがに…な」

少しは結婚相手を疑う罪悪感を持っているのか、アルは顔を逸らした。

「もう、これは使っちゃいけないのだけど…仕方がないわ！」

瑠那は兄に自分の手のひらを向けた。

「危ないっ！！！」

アルが声を放った途端、彼女は魔法を発動させた…近距離で、自分の兄に向かって。
本気で殺す気だったのか…アルは瑠那の激しい兄への憎しみを知って驚く。

ところが…

「あ、れ…魔力が回復してる？…もしかして、光魔法？」

勇者が驚きの声をあげる。

「そうよ。これで、無罪確定？」

瑠那はアルに向かってにっこり笑った。

光魔法は、邪な心を持つものには絶対に使えない。これで、信用してもらえるだろう。

「…まあ、後で話はじっくり聞かせてもらうがな」

アルに怖い顔をされ、瑠那は視線を逸らした。

8 (後書き)

お気づきの方もおられるかも知れませんが、これは短編「黒き華」を元に作ったものです。
いい加減な文章ですいません。

「ところで、結婚式いつやるの？」

勇者がわくわくした様子で聞いてくる。

「4カ月後くらいじゃないか？」

「ええ！？」

「はあ！？」

アルがさらりと言った言葉に二人は驚いて声をあげる。

すぐに結婚式は終わると思っていたのだ。今は夏期休暇だからその間に済ませれば問題ないと思っていたのに…。

「いや、俺はてつきり瑠那ちゃんの結婚式が近日中にあるんじゃないかと思って、帰って来たのに…」

勇者はがくつと膝をついた。

「各国に発表もしたし、彼女が俺の妻であることを知らしめれば大丈夫だろう。あとはそのうち適当に済ませればいいだろう」

「お前つ何てことを！結婚式は女の子の憧れだぞ？質素な結婚式じゃあ一生後悔すんだよ？可愛い妹の結婚式を蔑ろにしたら許さないからな！」

勇者はアルに掴みかかる。

「……………ルーナ、何で黙っているのだ？」

「……………」
「もしかして、怒っているのか？」

「……………帰る」

「……………は？」

「地球に帰るって言ってるの。そんな何ヶ月もこちらにいられないわ。それに祖父母のことも気になるし…」

「瑠那ちゃん！俺をおいて帰る気か？」

「ルーナ！王太子妃が不在でいいと思っっているのか？」

二人が必死で止めるにもかかわらず、瑠那は無視して歩き出そうとした、が…

瑠那は勇者と王子、二人に両腕を掴まれ、動けなくなってしまった。

「別にいいでしょ？4カ月後には帰ってくるって言ってるんだから」

「駄目だ」

瑠那はアルをじっとと睨むがアルはまったく気にしない。

「そんなことを言うなら結婚式まで本気で閉じ込めるぞ？」

い、今さらつと恐ろしいことを言われた気が…

「分かった！ここにいます！…でも、できるだけ早くしてね？」

最後は、可愛らしく頼んでみた。

「……………分かった。善処しよう」

アルはそっぽを向いて答えた。

…もしかして、効果アリ？うっわー、イケメン王子のありえない一面…。意外と女性に耐性ないのか？でも、これは面白いぞ？

瑠那はにやつと笑って顔を背けたままのアルの頬にキスしてみた。案の定、顔を真っ赤にした。

「……………っ、何やってんだ」

「いや、善処してくれるって言うから、感謝のキス？」

おどけて言ってみせる。

「あー！アルずるいぞ！瑠那ちゃん俺にも…」

…一人蚊帳の外な勇者であった。

夕食は、王子と兄と一緒にとることになってしまった。

王子と兄はかなり仲が良いようで、二人で会話が弾んでいる。

…どうでもいい会話が。

「おい、瑠那ちゃんに優しくしてるだろうな？」

「……………気をかけてやっている」

…嘘。あれが精一杯の気遣いだとも言いたいのか？

「瑠那ちゃんてかわいいだろう？未来の王妃にはぴったりの子だったろう？」

「まあ、悪戯はするし、手がかかるが…さすが、万人に愛された女の子だ。優れた容姿をしている」

…人生で彼氏が一人もいなかった者に、地味女として生きてきた私にその褒め言葉は間違っているだろう。たしかに、お母様似だといわれるが…

しかも、手がかかるって…私は子供？

「瑠那ちゃん、頭も良いだろう？だって、一回見ただけで、教科書全部覚えちゃうくらいだもん」

「…ほう、そんな才能があるとは知らなかったな。ぜひ、これから勉強で生かして欲しいものだ」

…なんか、視線が、アルの視線が怖いのは、気のせいかなー？

「でき、ぶつちゃけ二人の仲はどんくらいまで進んでるわけ？」

「……………それなりに仲良くやっている」

…うん、その通りだ。苦手なイケメン相手に私は良くやっていると思う。政略結婚とはいえ、不仲ではいたくない。

「で、もうキスしたの？」

「……………」

アルは黙り込んでしまった。

…いやいや、そこで黙ったら肯定しているようなものでしょう？

そういえば、お互いに相手をからかってふざけていたとはいえ、キスをしてしまったことを思い出す。あの時のことは、完全に忘れていた。

こちらの世界では、キスは普通だ。親しい人同士なら、当たり前キスを贈る。…唇にするのは普通ではないが。

とはいえ、結婚したし、いいんじゃないの？…などと楽観的に考えていた。

「そっかー。順調なんだな！安心したよ。帰ってきてお前が瑠那ちゃんに冷たい態度とってたら、どうしようかと思ったよ」

…正直、兄がアルと私の仲を認めるような発言をすることに驚いた。だって、私の結婚相手は誰も認めん！とか言っていたような人だし、ね。

「お兄様、アルは私の相手として合格なの？」

「当たり前だ。アルは人の本質を見極めることができる。だから瑠那ちゃんの魅力にも気付いてくれるはずだと思ったんだよ」

「俺が彼女に惚れない可能性は考慮しないのか？」

「いや、だって、瑠那ちゃん可愛いし？魅力を知ったら好きにならないはずがないじゃないか」

…このシスコンは、平気でこういうことを言う。

アルは一瞬呆れた表情を見せたが、そのまま聞き流していた。仲が
いいだけあって、兄のそういう発言にも耐性があるらしい。

「で、一つ問題が出来上がったわけだが…レオン、明後日父上に謁
見するように…とのことだ」

レオン それが、兄のこちらでの名前。母は、私達が将来ど
ちらの世界も選べるように、と二つの名前を与えた。二つの名前に
混乱しないように、名前の発音は似ているが。

「うん？いつものことじゃないか？」

兄は、何が問題なのか分からないといった風に首を傾げた。

「 その折には、勇者の妹も一緒に謁見するように、とも言
われた」

「まじかつ！？」

兄は驚きを隠せない様子で言った。

「何か、私が謁見することに問題でもあるの？」

無邪気に聞く瑠那に、二人は哀れみの視線を向けてきた。

「父上は、教養や礼儀作法に厳しい方だ。
に叩き込んで貰う」

明日から、全て頭

…何か、すごく嫌なことを聞いた気がした。

「殿下っ！ルーナ様が逃亡なさいました！」

「なに！？あの女…またか！」

そう、瑠那は全力で逃げていた
るために。

礼儀作法の教育を逃れ

もう、城内の通路という通路は調べ尽くしてある。ちゃっかり、隠し通路の情報も持っていたりして。

瑠那は兄がいつもこっそり鍛錬している城の片隅に辿り着いた。ここなら、人目にもつきにくいので見つかるまい。

「あれ？瑠那ちゃん？」

先ほどまで素振りをしていた兄が驚いた表情でこちらを見ている。

「兄様、かくまって！」

そう叫んで、兄の下に駆け込んだ。

兄はいったん鍛錬を止めて、草むらに座り込んだ瑠那の隣に腰を下ろした。

「ごめんね、俺のせいで大変な思いさせて…瑠那ちゃんの気持ちも

確かめないで。確かに、結婚なんて大切なことを軽軽しく決めるべきではなかった」

「兄様」

瑠那が咎めるように言った。

「私は、兄様がそれが良いと思ったのなら、何も言わない。私の命と比べたら、結婚しか選べないでしょ、兄様は」

「瑠那：ありがとう」

兄は瑠那に抱きついてきた。普段なら押しつけるところだが、今日だけは許してあげた。

…おそらく、兄は兄なりに瑠那のことを心配していたんだと思うから。

「それに、別に結婚したって、今までの生活が変わるわけではないし」

「……………へ？いやいや、変わるでしょ、180度」

まあ、白鳥家は名家なのでそれなりに裕福な生活を送っていたが、ここでの煌びやかな生活には敵わないだろう。

それに、王族の一員としてたくさんの仕事がある。今までのように自由な生活が送れるはずがない。

「私、結婚式が終わったら城にはいないつもりだから……………」

…アルが聞いたら怒るんだろうな、きっと。結構真面目な奴だし。たぶん、妃としての責任を果たさなくてどうする！とかって言うん

だろうな」。

「さすがに、王太子妃がないのはまずいんじゃないか？」

「私に求められたのは他国に手出しされない身分をもつことだけで、実際はいてもいなくても問題ないでしょう？」

「いや、俺が瑠那ちゃんに会いたいし。せつかく会えたのに出て行くとか寂しいこと言うなよ」

「今まで別々だったんだから、今さら変わらないわよ」

「えー、俺は瑠那ちゃんなしでは生きていけないのに！」

そんなこんなで賑やかな会話が続く。

「そつえば、しーちゃんは元気？」

しーちゃんとは、瑠那の姉であり、兄にとって双子の妹にあたる。…ということは、勇者の血を引く妹とは、確実に姉のこととなる。

「あ、お姉様なら異世界に召還されて巫女やっているわよ？」

「……………は？今、何て？」

「だから、異世界で巫女やってるって…。なんか、おばあ様の血筋が異世界の巫女の血筋で、召還されたみたいよ」

「異世界って…こことは違うの？」

「ええ、別の世界。すごいわね、うちって3つの世界の血を引いているのね」

「……………」

あまりの衝撃的事実にしばし呆然とする勇者。

「あ！おいルーナ！お前また脱走しただろう？」

遠くのほうからアルの声が聞こえてきた。

「あ！アル、よくここが分かったわね」

「黙れ、逃走常習犯。王太子妃としての」

「はいはい、わかっていますよー。王太子殿下さま」

「貴様つ。脱走のせいで勉強が遅れているのだぞ？」

「これでも優秀じゃない、言葉は習得してるし」

瑠那は腰に手を当てて威張っている。

「さつさと来い！今日は勉強時間を増やしてもらっぞ」

「え〜」

「文句言っな。早く歩け」

瑠那はアルに連れられ、去って行ってしまった。

残された勇者はあまりのことに絶句して、固まっているままだ。

3つの世界の血を引いている…？しかも、しーちゃんが他の世界に行ってるって？もう、わけが分からない…。

ただ一つ言えるのは、彼女が自分以上に何かしらの情報を持っているということだ。

もしかしたら、母さんのことも…？

母は、異世界で行方不明になって消息が掴めないままだった。

生まれたばかりの赤ん坊だった瑠那が地球に送られてきた時は正直驚いた。てつきり母はもう死んだのかと思っていたから。

…てか、それ以前に瑠那ちゃんあんな性格だったか？

人の手を煩わせるようなこともなかったし、大人しくて聡い子だった。いつも優しく、あんな風に人をからかうことなんてなかったのに…。

俺はてつきり、いい子にして王太子妃のための勉強に励んでいると思っていた。

ああ…混乱することだらけだ。俺はどうすればいいんだ？

勇者は頭を抱えてしまった。

11 (後書き)

家族関係が結構見えてきました。

さてさて、どうなるのでしょうか？

「おい、お前、どうする気だ？」
目の前には、世の女性たちが見たら喜びそうな、王子様の正装をしたアルが眉間にしわを寄せて立っている。

とうとう、礼儀作法の勉強を逃げ回りつづけ、謁見の日が来てしまいました…。

多少は練習しました、多少は。昨日の夜にアルに必要な最低限のことは叩き込んで貰った…はず。

「なるようになるわよ、大丈夫、大丈夫」

笑いながら瑠那は手をひらひらと振った。

今日は瑠那もきちんとドレスを着て化粧を施している。

いつもは楽な格好で城内を歩き回っている（逃げ回っている？）のだが、謁見となればそんな格好で望むわけにもいかない。

侍女さんたちはかなり張り切って、瑠那をお姫様に仕立て上げた。

ドレスは瞳の色に合わせて淡い青色のを選び、髪飾りは黒髪に映えるように白い大きな花を選んだ。

「しかし、本当に化けるものだな…」

アルが感心した様子でこちらに視線を向けてくる。

「侍女さんたちのおかげね」

「いや、ルーナはそのままでも綺麗だ。何と云うか…存在感が希薄だから目立たないが」

「そんな評価、はじめて貰ったわよ」

本当に、勿体無いと思うのだ。彼女は誰が見ても美しいと言っほどの美貌を持っている。だが、それにもかかわらず、人の目を引き付けない。表現に困るが…綺麗なのに、地味なのだ。

しかし、今日は違うようだ。きちんと、人を引き付ける魅力が出ているように思う。普段と何が違うのだろうか。

「ほら、手を出せ…」

アルはすつと手を差し出してきた。

瑠那は、その手のひらに、自分の手を重ねた。

途中で、勇者と合流した。

「瑠那ちゃん、可愛いー！！さすが俺の妹だー！！」

そう言いながら、瑠那に抱きついてこようとしたが…。

「今はやめる。ドレスや髪が乱れるだろう」

「え〜。普段見ないくらいにお洒落してたら、抱きつきたくもなるよ」

…アルが冷静に止めてくれた。

長いこと歩いて、ようやく謁見の間に辿り着いた。

「ルーナ、絶対に失態を犯すなよ」

アルから恐ろしい声が聞こえて来て、謁見の間に入った。

国王陛下の前に行くと、まず礼をする。

昨日、アルから教えてもらったとおりに頭を垂れる。

瑠那はまったく気付かなかったが、彼女の隣ではアルが怒っていた。
：あいつ、完璧な礼儀作法、出来るじゃないか：馬鹿にしゃがって。

「ほう、急いであつらえた姫君にしては綺麗な礼をするな」

国王は嫌味を言ってきたが、瑠那は反応しない。今はまだ、言葉を話すのを許されていないからだ。

「面を上げよ」

当分して顔を上げることが許される。

「アルヴィアス、そちらがお前の妃か？」

「はい、こちらがわが妻となった、ルーナ・リーウエン。勇者レオンの妹にあたります」

「ほう…にしては、勇者の色をもっておらぬな、ルーナ・リーウエン？」

「はい。おそれながら、わたくしは兄の異父兄妹にあたります、陛

下
「

瑠那の完璧な返答に、アルが目を見開いている。

「そうか」

陛下はそのことには興味を示さず、次の話に移った。

「勇者レオンよ。勇者としてのつとめ、ご苦労だ。何か、要望はあるか？」

「はい。妹の花嫁姿を、出来れば出発する前に見たいのですが」

ナイス、兄様！

瑠那は心の中で叫んだ。

「わかった。手配しよう」

国王はあっさりと受け入れた。

「ところで…レオンよ、国内で何か、変わったことはないか？」

兄は、国内を巡り、修行中の身である。

「はい、国境付近で小競り合いが激しくなっているようです
「そうか」

「何かしらの対処をした方がいいかと」

「ルーナ殿は、どう思うか？」

王が、挑戦的な瞳を向けてくる。

何でこっちに話を振られるのかなー？世間知らずの女に、政治の口が何を聞こうというのかしら？

アルは冷や汗をかいていた。

：まずい。礼儀作法や一般常識については叩き込んだが、現在の国の情勢などについては何一つ教えていない。

「そうですね、原因は軍部の暴走によるものです。国家は弱体化してもう軍部を抑えられそうもありませんし…。軍が国家を倒して強力な軍事国家が生まれる前に、何らかの対処をしておいた方が得策ですね」

瑠那はアルの心配をよそに、すらすらと淀みなく答えた。

「…それは、単なる憶測かな、花嫁殿？」

「いえ、現地での入念な情報収集によるものです」

「確か、花嫁殿はこちらに呼ばれたばかりだと聞いたが…」

「もともと私はこちらの住人でございます。それで、しばしばこちらに滞在しているのです」

その瞬間、3人は驚いたような顔をして瑠那を見た。

しばしばこちらに滞在している…？

「ほう？父親は、こちらの世界の者か？」

「はい。私は、セレイアの王の血を引くものです」

「亡き国王には、子がいないと聞いていたが？」

「表向きは。国王には、妃もいましたし、娘もおりました。命が狙われる危険性から、存在は秘匿されておりました」

「そうか、礼儀作法が完璧なのはそのせいかな」

陛下は納得したように頷いた。

「セレイアの姫よ。妃として、アルを支えてやってくれ。…ちなみに、子供は早い方がいいな」

にやりと笑ったその最後の表情は、もう国王の顔ではなかった。

…こうして、瑠那の謁見は無事？終了したのだった。

12 (後書き)

瑠那ちゃんのお秘密がだいたい暴露されました。

謁見を終えた後、瑠那はアルとレオンに呼び出された。

「ルーナ、こちらに来ていた…というのは本当か？」

「そうよ、それが…どうかしたの？」

「どうやってこちらへ来ていたんだ？」

「もちろん魔法で。空間転移の魔法があるでしょ？私、魔力が強いから簡単に出来るのよ、すごいでしょう」

ふふ、と笑みを浮かべて瑠那は言う。

「いつから、こっちに来ていたんだ？」

次に問いかけてきたのは兄。

「こちらとあちらを行き来するようになったのは、2年位前かな？兄様が勇者として召還された時には驚いたわ」

…もう、予想外の展開でどこからつつこんでいいか、分かりません。アルとレオンは少し呆れ顔である。

「なあ、母さんの行方、知ってるか？」

「え、兄様ったら知らないの？」

「ああ、知らない」

「結構有名人なのだけ…。もしかして、国王陛下もご存知ないの？」

「は？何で父上？お前達家族も知らないのに、父上が知っていると思うか？」

まさかの事実。てっきり、みんな知っているかと思っていた…。

「えーと、結論を言うと…生きてます。今は、セリファスって国で新しい家庭を築いてて、子供は男の子が一人いるかな？あと、数ヶ月後にもう一人生まれる予定」

「うっそ、また兄弟が増えているのか？」

兄は信じられない、といった表情をしている。

だって、その二人を含めたら5人兄弟ってことになってしまっものね。

「でも、お母様には近付かない方がいいと思う。これ以上人質候補増やしたらまずいと思うわよ？」

勇者と母が接触すれば、家族だということがバレてしまう。そうすれば、勇者の弱点が増えていくばかりである。

「そっか…。分かった…」

兄はしょんぼりとして、寂しそうな表情をしている。

「でも、姿を見るだけなら出来ると思うわよ？セリファスの王妃様は、民にとっても気さくな方だからよく姿を見せられるのよ」

二人ともゆっくりり首を回してこちらを見た。

「……………王妃？」

「……………そうよ？」

「セリファスといったらうちと仲がいいぞ」

「なのは何で気付かないの」

「外交は苦手だ……」

「未来の国王が外交苦手でするのよ……」
頭を抱える瑠那の言葉にアルは眉をしかめた。

「ま、瑠那ちゃんそういうの上手そうだから任せればいいんじゃない？」

兄はアルを宥めるように言った。

「とにかく、絶対このことは内緒よ。これ以上敵に弱点さらすなんて、今度こそ世界が終わるわよ。お母様のごことは国家機密よ、分かった？」

瑠那はびしっと人差し指を立てていった。

「あ、あと兄様、地球に忘れ物したとかあったら遠慮なく言ってね。いつでも帰れるから」

「……………ああ」

勇者は複雑な心境だった。

あのとときの決意は何だったのだろうか？

帰る術さえ分からないこの世界に来て、命をかけて世界を救うことを決めて。

地球のことは、家族のことは、友人のことは、全て忘れるようにしてきたのに。

「地球に帰れるわよ」って……。

こつもあつさり言われると、なんだかなあ。

まあ、そこが瑠那ちゃんらしいのかな？

彼女は、誰も持っていないものを与えられる人だから。

14 (前書き)

帰って来ました。

すいません、一話抜けていました…抜けた一話は放っておいてください。

ついに結婚式当日。

何時間にも及ぶ身支度が整うと、アルは準備を整えて瑠那を待つ。女性はおそらく時間がかかるのだろう…と思いつながら待っている。瑠那が美しいドレスを身に纏い姿を現す。

アルは瑠那を見た瞬間目が離せなくなってしまった。

白い肌がドレスの間から覗き、美しい黒髪は結い上げられベールを被せられている。

「綺麗だな」

「ありがと、殿下も素敵ね」

瑠那は不機嫌な顔をしているかと思ったが、その様子もなくアルはほっとした。

その後、結婚式は滞りなく進んでいった。瑠那は王太子妃になるに相応しい完璧な振る舞いを見せてみせた。

「
それでは、誓いの口づけを」

瑠那とアルは向き合って互いに笑みを浮かべる。

アルはベールをそっと上げると息を呑んだ。

会場の明かりによって彼女の瞳はキラキラと輝き、小さな唇には紅

がのせられて彼女は傾国の美女と言われてもおかしくなくらい美しかった。

二人の唇が重なった瞬間、城中が拍手に包まれた。

アルヴィアスは瑠那の寝室に向かっていた。その表情は、幸せな結婚式を迎えたにしては浮かないものだった。

彼の悩みは、愛しい妻に関するものだった。

いままで彼女の寝室に入ることに躊躇いはなかったのだが、彼女が結婚を嫌がっていたことから考えて、初夜は受け入れてもらえないのではないか。

しかし、妃になることに難色を示しているわけではない。妃の義務である子作りは、了解しているのだろうか。

そんなことが頭の中を巡りつつも、ついに寝室のドアの前に来てしまった。

「ルーナ、入るぞ」

彼女の部屋は、灯りも点けられておらずわずかな月明かりだけが差し込んでいた。

「ルーナ？」

「嘘っ、アル？何で？」

真っ暗な中で、彼女の影が寝台の近くで動いた。

アルヴィアスは彼女の傍まで近づき、抱きしめた。触れるだけのキ

スを何度もし、徐々に深く口づけ、そのまま彼女を寝台に押し倒す。

「……………なんで、そんな恰好をしている」

「……………」

服に触れると、彼女の服は夜着ではないことが分かった。そもそも服は、手触りからして城のものではない。庶民が普段着で着るような、質素なものだった。

このまま彼女と共に夜を過ごそうと思っていたが、彼女の予定は違ったようだ。

「妃としての役割を放棄するわけではないだろうな？」

「それは、違うけれど……」

「では何故、初夜に脱走するつもりなんだ？」

彼女はアルヴィアスの問わんとしていることを理解したようで、口を開いた。

「えつと……子どもを作るのは、待つて？私、まだあちらの世界では学生なの」

瑠那はまだ一応中学生だ。子供なぞできるとまずい。

もともと、母が早くに家からいなくなっているのに加えて、兄と姉も異世界に行っている。

若くして家出の上父親が誰かも分からない三人の子供を育児放棄し実家に預けたままふらふらしている母に、最近まで礼儀も完璧だし頭も良いし優等生ね、なんて言われていたのに突如家に帰って来なくなった兄たち。

目が…。

そんな状況で自分が妊娠、とか言ったら世間様の

「何年、待てばいい？」

「んー、大学まで行きたいから、あと6、7年くらい？」

「ふざけるな、俺に7年も待たせる気が」

「ごめんね。私、こつちの世界と地球、どちらもまだ選べないの」

瑠那は悲しそうに笑った。

もちろん、ここで地位を得てしまった以上こちらを手放せないことは分かっている。だが、母も兄も姉もいなくなった家に祖父母を置いて行くことはできない。というか、瑠那まで失踪したら、いくら祖父母が家族の事情（＝異世界に行ってる）を知っていたとしても、心配するだろう。

「これから聞くことは、誰にもしやべってはだめよ？」

瑠那はアルに念を押すとんでもないことを語り始めた。

「セレイアの王族は、ある義務を負っているの。“世界が危機に瀕した時、その力でもって救わなければならない”という、義務。もちろん、勇者はいるしその出番はめつたにないけれど…。

セレイアの王族が動くときは、本当に危機に直面している時…つまり、勇者の手に負えない事態があるとき」

「だが、今回の勇者は歴代最強だ」

「その、歴代最強が、魔王もだとしたらどうする？もともと勇者は不利なの。魔王とその多くの配下に対して、勇者は一人。だけど、勇者は魔王を倒せば終わりだったから今まで勝つことができた。

でも、今回の魔王は賢い。もしかして、魔王に手が届かないかもし

れない。…だから私が力を貸すの」

アルは目を瞠ったまま、動かない。

「ごめんね。これは言い訳に過ぎない。私が王太子妃としてここに
いる自信がないだけなの」

そのまま瑠那は窓から身を乗り出した。

「待て、行くなっ！！」

「何か王太子妃の仕事があるならこれに連絡して。ちゃんと帰って
くるから」

そう言っただけで彼女は連絡用の魔石をアルに放ると、そのまま窓から跳
んだ。

「おい、ルーナ！」

その時突風が吹き、カーテンがバタバタとはためいた。
アルは思わず体を伏せて絨毯の毛を掴み、風に耐える。

風が収まると、慌てて窓に駆け出した。

窓から身を乗り出して見ると 星空の下、空を駆ける黒龍が
遙か彼方に見えていた。

14 (後書き)

まだ完結ではありません。結婚編？が終わっただけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4404n/>

Tomと過ごした日々

2011年5月6日12時41分発行